座間市男女 9 人殺害事件にみる，自殺とネット・コミュニケーション

渋　井　哲　也

目　　次

はじめに
1. 自殺とインターネットにまつわる事件史
2. 座間事件
3. 事件に関するアンケート
4. 考　　察

はじめに

2017 年 10 月末，神奈川県座間市の住宅街にあるアパート内で，男女 9 人の遺体が見つかった。同アパートは駅から徒歩 7，8分の距離で，その周辺は一戸建て住宅ばかりだ。小田急線の線路近くで，昼間は電車が走る音以外は聞こえない閑静な住宅街だ。夕方になると，小・中学生が帰宅する時間で友達と別れの挨拶をするような姿が目に入る。そんな場所から 9 人もの遺体が発見されること自体が衝撃的だった。

筆者は，この事件（以下，座間事件）について，テレビ記者から第一報を受けた。当初は，「インターネットで知り合った」「9 人が死亡している」などの断片的な情報から，インターネットで知り合った見知らぬ人同士の集団自殺，いわゆるネット心中ではないかと思っていた。仮にネット心中だとすれば，9 人というのはこれまでにない人数になる。しかし，情報が整理されていく中で，死体遺棄事件ということがわかってきていた。

マスメディアは座間事件が起きた背景の一つとして，SNS で「死にたい」とつぶやく若者たちが多いということに注目した。中でもツイッターで，かつ，特定の話題をつぶやく際の目印，「ハッシュタグ」機能について解説するのも目立った。ソーシャル・ネットワーク・サービス（以下，SNS）を含むインターネットの中で，「死にたい」とつぶやくこと自体は，ある意味で，古い問題だ。インターネットが一般に普及し始めると同時に，そうしたユーザーは点在していた。しかし，子どもたちがスマホを持ち，どんな人であれ，インターネットに接続できる環境にあって，マスメディアはこれまで以上に危機感を煽ったという印象が筆者には強い。

そこで，座間事件にいたるまでの間に，自殺とインターネットにまつわる事件を整理したい。その上で，座間事件にみる自殺をめぐるインターネット・コミュニケーションを考察していきたい。

1. 自殺とインターネットにまつわる事件史

座間事件の前に，まず，インターネットと自殺に関連した事件の歴史を整理する。

1-1　ドクターキリコ事件

自殺とインターネットとの関係が最初に言われたのが「ドクターキリコ事件」だ。

1998 年 12 月，ホームページ「安楽死狂会」のコンテンツの一つ，「ドクターキリコの診察室」という掲示板で，自殺問題に関する相談，特に向精神薬に関する相談にのっていた，ハンドルネーム・ドクターキリコ，別のハンドルネームでは草壁竜次と呼ばれた男性が自殺した事件だ。

「安楽死狂会」も「ドクターキリコの診察室」も，

草壁が開設したものではない。このHPや掲示板を開設したのは，美智子交合（ハンドルネーム）だ。

草壁は，相談にのりながら，どうしても自殺願望が消えない相手に青酸カリが入った「EC」を委託保管していた。「EC」とは，エマージェンシー・カプセル（緊急カプセル）のこと。

美智子交合（1999）によれば，「我々（うつ病を患う人々）のこういう，どうしようもない気持ちなんて，所詮，我々にしか解らない」「医者の出す薬やカウンセリングなんかよりも，青酸カリの方が，余程自殺抑止力になる」と草壁は考えていた。つまり，死ねるクスリが目の前にあれば，逆説的に自殺を回避できると考えた。これは『完全自殺マニュアル』と同じように，自殺の手段を知っていれば，かえって，現実を生きようとするとの発想とほぼ同じだ。「いつでも死ねるのなら，今でなくとも」との発想が生まれると思ったのだ。

> 「強く生きろ」なんてことが平然と言われている世の中は，閉塞してて息苦しい。息苦しくて，生き苦しい。だからこういう本を流通させて，「イザとなったら死んじゃえばいい」っていう選択肢を作って，閉塞してどん詰まりの世の中に風穴を開けて風通しを良くして，ちょっとは生きやすくしよう，ってのが本当の狙いだ。（鶴見済，1993，195頁）

草壁は1990年に私立大学の理工学部に入学した。在学中には，毒物劇物取扱者，特定化学物質取扱者，有機溶剤取扱者の資格を取得した。1994年には，医療関係の会社に入社。1996年には薬局のチェーン店に転職。その後，学習塾の非常勤講師もしていた。草壁が青酸カリを購入したのは1997年2月だった。

草壁が使っていたハンドルネームはドクター・キリコ。由来は，モグリの天才外科医を描いた手塚治虫の漫画「ブラックジャック」の登場人物だろうと言われている。ブラックジャックが患者のよりよき生を願い，手術に挑むのに対して，ドクター・キリコは患者の安楽死を願うために治療を行う。しかし，草壁がドクター・キリコに関する情報を明示したことはなく，名の由来を知っていたかどうかは定かではない。ドクター・キリコと名付けたのは，「安楽死狂会」の管理人・美智子交合だ。草壁は由来を「知らなかったようだ」と述べている（美智子交合，1999）。

この事件が発覚した当初，草壁が自分でHPを開設し，「死の商人」をしていたかのような報道もあったが，草壁は，自分のHPをもっていなかった。そのため，すでに開設されていた精神病関連やクスリ関連の電子掲示板等に書き込みをしていた。しかし，掲示板でのコミュニケーションはまったくと言っていいほどコミュニケーションはとれていなかったようだ。情動的なやりとりというよりは，情報をやりとりしていただけだったと言われている（相田くひを，1999）。

しかし，委託していたうちの1人が12月15日，カプセルの蓋をあけて服毒自殺してしまったのだ。警察からその連絡を受けた草壁も自殺してしまった。

草壁から青酸カリを「購入」した最初の人物は，実は，「ドクター・キリコ」を名乗る前，個人的なやりとりの中で行われた。1998年3月18日，茨城県の男性が草壁の口座に3万円を振り込んだ。このときは，きちんとしたECとして委託はしていない。青酸カリはカプセルに入れられていなかった。一般郵便で送られて来て，不審に思った母親が男性に渡さなかったという。

次の購入者は，千葉県の男性。しかし青酸カリは送っていない。郵送したのは，クロロホルム500ミリリットルと抗痴ほう症薬（アルツハイマー治療薬）だ。自殺を幇助する目的があったのかは不明で，「第一の購入者」と「第2の購入者」のやりとりは詳細はわかっていない（相田くひを，1999）。

7月3日，第2の購入者が自殺する。薬物を大量に飲んだ。ただ，ECを使用していないと警察

は判断した。使ったのは，睡眠薬と精神分裂病治療薬（メジャートランキライザー）。ECが死因ではなく，草壁が自殺幇助をしていない。しかし，「目の前に致死量の青酸カリがあれば，逆説的に自殺防止になる」との草壁の考えは，この時点で崩壊していたことになる。

このころ，美智子交合が『安楽死狂会』を開設する。このとき，別の自殺系サイトの掲示板で知り合っていた草壁を「ドクター・キリコ」と名付け，ホームページ内のコンテンツの一つとして，「ドクター・キリコの診察室」という掲示板を設置した。この「診察室」で表立って，「EC」や「青酸カリ」の名を出したことはない。しかも，「重度のうつ病患者でない人にはECの委託保管はしない」，ECの委託保管は「うつ状態が酷く，長く通院・投薬治療をしてもなお，回復の兆しがみられない人」を対象にするとの基準があった。

美智子交合本人も購入していた（しかし，美智子交合は当時は「うつ病」と思っていたが，実際には「境界例」だと自著で告白している）。ECを入手後の８月下旬に，美智子交合は樹海をさまよった。そのため『安楽死狂会』は放置されていた。結局，樹海近辺のバス停で昏睡しているところを保護される。その後，「ドクター・キリコの診察室」は別のホームページに移転する。同時に『安楽死狂会』も閉鎖した。

12月。最後の購入者が現れる。事件が明るみになるきっかけとなる，杉並区の女性だ。このときのやりとりはメールではなく，電話だった。そこでECの委託保管が契約された。これまで第４の購入者以外は，「使用しない」という草壁との約束を破り，すべてECの蓋を開けてしまっている。ただ，目にした者たちはみな，実際には使用しなかった。しかし，この女性は飲んでしまった。昏睡，痙攣しているところを母親に発見され，救急車で病院に運ばれた。病院からの電話で草壁は女性がECを飲んでしまったことを知る。草壁自らも服毒自殺した。ほぼ３か月後，1999年２月12日。草壁は自殺幇助の疑いで，被疑者死亡のまま書類送検された。

1-2　ペット美容師自殺幇助事件

「ペット美容師自殺幇助事件」も「ドクター・キリコ事件」と同時期に起きている事件だ。1999年8月27日，静岡市在住の無職女性（37）が愛知県豊橋市内のビジネスホテルで自殺を図った。筋弛緩剤をヨーグルトに混ぜて食べ，一時意識不明の重体になった。同日午前10時ごろ，ホテルの従業員が電話し，午後部屋をノックしたがいずれも応答がなく，不審に思った従業員が119番し，倒れている女性を見つけた，部屋には遺書があった。

女性は「自殺系サイト」で，「死にたい」と書き込んでいた。愛知県警捜査一課と豊橋署は，自殺幇助未遂容疑で薬品を郵送した人物を探した。女性は一時危篤状態に陥ったが，まもなく意識を回復した。「死にたくて，電子メールで入手した薬を飲んだ」「5万円で購入し，メールで指定された口座に振り込んだ」などと話していた。

その後，2000年１月，兵庫県尼崎市のペット美容師の女が逮捕された。５月には初公判が名古屋地裁豊橋支部で開かれ，起訴事実を全面的に認め，懲役３年，執行猶予４年（求刑・懲役３年）を言い渡した。

判決によると，被告は，「自殺系サイト」の掲示板で自殺願望を訴えていた静岡市の無職女性に対して，「（自殺するには）薬を使います。青酸カリのように苦しむことも全くありません。全部砕いて，ヨーグルトにでも混ぜて，食べてね」といった内容の電子メールを送信した。そのうえで，筋弛緩作用のある「カリソプロドール」などを含む薬物100錠を郵送した，という。

被告は1998年10月に購入したノートパソコンを使って，ホームページなどから自殺に関する情報を入手していた。「自殺系サイト」では，自殺のための薬物を欲しがっている人が大勢いることを知った。さらに，「クスリ系サイト」も閲覧し，睡

眠薬など薬物に関する知識も詳しくなった。

そのころ，母親から働くように言われたが，「自殺のための薬物を売って，金をかせごう」と思いついた。タイの薬品会社などから薬を入手し，インターネット上で薬物販売を始めた。ハンドルネームは「おばさん」と名乗った。「おばさん」は静岡市の女性も含め，45 人に薬を販売し，約 89 万円を得ていた。しかし，静岡市の女性のほかに自殺を図った人はいなかった。

1–3 「ネット心中」

インターネットで出会った人同士が自殺する場合もある。2003年に見ず知らずの者同士が集団自殺する「ネット心中」が連鎖するが，実は，ネットで出会った者同士が自殺することは以前から存在していた。

2000 年 11 月 26 日，福井県内で男女の心中死体が発見された。男性は福井県武生市在住の歯科医（46），女性は愛知県在住の元 OL（25）。死因は睡眠薬の大量摂取による薬物中毒死だった。2 人の接点だったのがインターネットに存在する「自殺系サイト」の掲示板だった（掲示板は特定してない）。

歯科医師は自宅で歯科医院を開業していた。既婚者で，2 人の子どもがいたが，妻とは別居していた。借金と循環器系の疾患に悩まされる日々を送っていた。元 OL は独身だが，家庭環境に悩み続け，会社に勤めながらも鬱々とした毎日を過ごしていた。

10月上旬，偶然にも同じ掲示板へ 2 人は悩みを書き込むことになる。メールアドレスを公開していたことから，メール交換を始めた。メールは十数回にわたってやりとりされた。歯科医師である男性が一緒に死ぬための睡眠薬を用意した。

2 人が初めて顔を合わせたのはメール交換を始めてから約 3 週間後の10月 20日前後。「心中」とは言われたが，恋愛関係も肉体関係もなかった，と言われている。その後，2003年以降の「ネット心中」は，恋愛関係や肉体関係が認められないものがほとんどだ。自殺そのものが目的だ。

広辞苑（第 7 版，岩波書店）によると，「心中（しんじゅう）」は，①人に対して義理を立てること，②相愛の男女がその真実を相手に示す証拠，放爪・入墨・断髪・切指の類，③相愛の男女がいっしょに自殺すること，情死，④一般に 2 人以上のものがともに死を遂げること，⑤比喩的に，打ち込んでいる仕事や組織などと運命をともにすること，との意味だ。

自殺との絡みで「心中」となると，③の意味で使われることが多いが，「ネット心中」の場合，④の意味となる。

数日後の25日午後 11時 40分ごろ，歯科医師の自宅で，睡眠薬のケースが散乱する中で，冷たくなっている歯科医師と元 OL を歯科医師の家族が発見した。このケースが，報道された中では最初の「ネット心中」で，読売新聞が「ネット心中」という言葉を使った。しかし，当時は，他のメディアで「ネット心中」と使われることなく，また，2003 年のときのように連鎖することもなかった。

1–4　メル友自殺未遂

「メール友達の件で自殺するかもしれない」。2000 年 12 月 27 日，そう言い残して福岡県田川郡内の公立中学 2 年生（14）が同県飯塚市の 5 階建てビルから飛び下りた。メル友の名古屋市内の高校 2 年生（17）も一緒だった。2 人は病院に運ばれた。中学生は重傷。高校生は意識不明の重体。ビル 4 階の外階段の手すりに乗り越えた跡があった。

飯塚署の調べ等によると，2 人とも家出中で，高校生は悩みごとを抱えていたという。中学生は25日に家出をし，26日に家族から捜索願が出されていた。高 2 女子は 27 日に捜索願が出ていた。

現場は飯塚市の中心部で，飛び降りる前に，少女 2 人が空きビルの 1 階で手首を押さえているのが目撃されている。外階段の 1 階から 4 階まで血痕があったという。飛び降りる前にリストカットをしたのだろうか。それで，死に切れず，飛び降

りを決意したのだろうか。飛び降りたと思われる5階の踊り場には2人の靴や携帯電話などの所持品があった。

1–5　恋愛としてのネット心中未遂

2001年5月26日午前4時50分ごろ，名古屋市北区の8階建てマンション駐車場に男女が倒れているのを，近くのマンションに住む会社員が見つけた。男性は全身を強く打って即死，女性は意識不明の重体となっていた。

2人は，愛知県春日井市の無職男性（21）と，大阪府高槻市の無職女性（19）。2000年5月，携帯電話のメールを通じて知り合い交際を始めた。どのようなサイトかは不明だ。

3月上旬，春日井市で双方の両親を交え結婚について話し合ったが，まだ若いことや無職の2人の生活への不安などを理由に双方の親から反対されていた。恋愛としての心中，広辞苑の③の意味に近い。

その翌日，2人は睡眠薬を飲んで自殺を図り，病院に運ばれた。その後，春日井市内の男性の祖父母宅に同居していたが，5月25日昼すぎに家を出たまま，行方が分からなくなっていたという。

1–6　出会い系サイト心中未遂

2002年9月，出会い系サイトで知り合い，一緒に家出した女性を絞殺したとして，北海道警千歳署は殺人の疑いで，住所不定，無職男性（24）を緊急逮捕した。男は23日午後9時ごろ，千歳市内のホテルで，一緒に宿泊していた福岡市の無職女性（22）の首を絞め殺害した。

2人はインターネットを通じて知り合い，8月ごろから2人で家出していたという。23日早朝に同ホテルにチェックインしたが，チェックアウトが遅いのを不審に思った従業員が部屋を訪ね，発覚した。「客室内で女の人が倒れている」と110番通報した。

12月5日，札幌地裁（森島聡裁判官）の初公判で，男は起訴事実を認めた。女性が出会い系サイトで知り合った別の男性に，男との関係を断ち切られると思い込み，「別れ別れになるくらいなら一緒に死にたい」と心中を持ちかけた。

そして道内のホテルを転々とした。9月23日午後9時ごろ，千歳市内のホテルで，女性が「薬じゃ死に切れない。殺して」と頼み，首にネクタイを巻きつけて窒息死させた。その後，男は自分でも死のうとして，風呂場でカミソリで両手首を切った。が，死にきれず，軽傷だった。

1–7　自殺系で知り合った男女が練炭で心中

2003年，「自殺系サイト」で「心中相手」を募集して，複数で自殺をするという，いわゆる「ネット心中」が連鎖した。1–3の「ネット心中」とは違い，初めから「心中相手」を募集した形だ。そのきっかけとなったのは，埼玉県入間市で起きた事件だ。だが，その事件の呼びかけ人が参考にしたケースがあった。

参考にした事件は，2002年10月に，東京都練馬区のマンションの一室で，男女2人が自殺していたものだ。この「ネット心中」は，警察での公式発表はされていない（スクープした毎日新聞の報道によると，次の通りの概要だ）。

「やはり1人で死ぬのは寂しい。相手は誰でもよかった」という遺書が残されていた。書いたのは大阪市内の女性（32）。自殺の方法は，発見時には，玄関や窓はガムテープで目張りがしてあった。部屋の中央で，マンションに住んでいた男性と，女性が並んで倒れ，亡くなっていた。そばには，新しい七輪が置かれ，練炭をたいた跡があり，死因は一酸化炭素中毒死だった。

2人の出会いはインターネットの自殺願望の掲示板で，知り合って1ヶ月ほどだった，という。どこの自殺系掲示板で知り合ったのかはわからないが，「インターネットの自殺掲示板で知り合った○○さん（男性の名前）と死にます」という女性が遺書を書いていた。

女性は自宅に家族あての遺書も残していた。「生きる気力をなくした。人と話すのも嫌だ」と書かれていたという。女性の家族は，警察に「子どものころから自殺願望があった」と話していた。

一方，男性のパソコンには，10月9日に女性に送ったメールが残っていた。「いつ来ますか」「七輪で確実に死ねます」「知り合ってすごく短い 1カ月でしたね」などの内容だった。男性の自宅までの行き方も説明するメールもあったという。

この新聞報道を模倣したのが，埼玉県入間市で起きた男性1人，女性2人が亡くなった「ネット心中」だった。その後，さらにその「ネット心中」をまね，同じような「練炭自殺」による「ネット心中」が連鎖していった。

「ネット心中」で，最も多くなくなったのは死者7人の事件であり，2004年10月，埼玉県皆野町の山中で亡くなった案件だ。この事件の特徴としては，2つのグループが一緒になったことで人数が増えたということがある（渋井，2005）

1-8　自殺系サイト殺人事件

ネットユーザーの自殺願望を利用した事件は初めてではない。2005年8月2日に発覚したのが，自殺系サイト殺人事件だ。捕まったのは派遣社員のM死刑囚（執行済）。男性2人，女性1人が殺害された。

2005年2月19日午後8時30分ごろ，自殺系サイトに投稿をしていた無職の女性（25）に対して，練炭を利用した一酸化炭素中毒自殺を一緒にするかのように装って，会うことになった。

女性は高校を中退後，実家を離れて住み込みでパチンコ店でのアルバイトを始めたが，人間関係がうまくいかずにうつ病となった。その後，自宅に引きこもり，自殺未遂をしたりして入院することもあったという。そんな中で，女性は自殺系サイトにアクセスしていたのだ。

大阪府河内長野市内の駐車場で，女性に「一緒に死ぬために」と騙して，抵抗できないようにするために，結束バンドで手足を縛った。そして，いきなり口にガムテープを貼り，口を塞ぎ，鼻をつまんで窒息させた。女性は失神したが，悶絶する表情が見たいと，女性の頬を叩くなどして意識を覚醒させた。そして再び，窒息させて意識を覚醒させる行為を約30分続けた，という。

そのうち，女性に体力がなくなり，悶絶する表情を見ることができなくなった。そのため，「最後の楽しみとして，窒息死させよう」と考え，ガムテープを口から剝がした後，約20分にわたってシンナーをかがせて，失神させた。そして，死体遺棄現場まで移送して，死体を埋めるための穴を掘った。車に戻ったMは，約10分間，女性の口と鼻を両手で塞ぎ続け，死亡させた。

5月14日から20日まで，14歳の少年が堺市内のインターネットカフェから自殺系サイトに投稿をしていた。この少年に対して，Mは，「ネット心中」をするかのようにして，メールを交換。少年に，一緒に死ぬ人と思い込ませた。21日に，Mは少年をJR南田辺駅（大阪市東住吉区）に誘い出した。トラックに乗せると，泉南郡方面に向けて進んだ。

午後3時ごろ，Mは車を停めて，少年の手足を緊縛。鼻を手で塞いで少年を苦しめ，失神させた。女性を殺害したときと同じように，この行為を何度も繰り返した。このとき，少年は体を動かして抵抗していた。

「お願いだからやめて。こんなことやめて」と少年は言うが，Mは，この抵抗の様子にかえって性的興奮を覚えた。少年は，「なんでこんなことするんですか」と尋ねたという。Mは，「オレの趣味や」と言って続けた。そして，Mは，縛られた手足をデジタルカメラで撮影したり，うめき声を出させるために，みぞおちを思い切り殴りつけた。

少年が失神中に，和泉市内に向かい，午後5時ごろ，駐車中のトラック内で鼻と口を塞いで窒息死させたのだ。そして，発覚を恐れたMは，遺体から衣服をはぎ取り，山中に遺体を捨てた。

少年は一人息子だった。将来は弁護士やプログラマーになりたいという夢もあったが，中学３年のころ，学校生活に関して悩みを持ち，うつ病になった。精神科にも通っていた。

Ｍの犯行は止まらない。自殺系サイトのユーザーだった男子大学生（21）に対してＭは６月10日午後５時半ごろ，女性や少年を殺害したときと同じように，「ネット心中」をするかのように装って，河内長野市内の空き地まで誘い出した。そして空き地に停めてあったトラック内で，手足を縛り，何度もタオルで鼻を塞ぎ，失神させることを繰り返した。

男子大学生は４人兄弟の長男で，大学入学で一人暮らしを始めていたが，取得単位不足から留年せざるを得なかった。これをきっかけにして，抑うつ状態，対人恐怖症の症状が出てきた。

2005 年１月ごろ，「長い人生，何回でもやり直しがきく。卒業したいのならがんばり，嫌なら中退してもいい」と，親子でそう話し合い，父親はそうアドバイスした。男子大学生は「オレ，がんばる。絶対，親を泣かすようなことはしないから，心配しないで。がんばって病気も治すから」と言っていた。

2. 座 間 事 件

2017 年 10 月 30 日午前，神奈川県座間市内のアパートから男女９人の遺体が発見された。室内にあったクーラーボックスの中から２人分の頭部が見つかった。遺体はバラバラにされていた。

インターネットでの「心中」の多くは，お互いが「死にたい」と思っている同士の自殺だ。しかし，「死にたい」という感情を悪意のあるユーザーが利用することがある。1-8 の「自殺系サイト殺人事件」もその一つだが，座間事件にも言える。

逮捕されたのは，同アパートに住む無職の男（27）。2018 年９月 10 日，東京地検立川支部は，精神鑑定の結果，責任能力があるとして，強盗殺人と強盗強制性交殺人，死体損壊，死体遺棄の罪で起訴した。

男は市内で幼少期を過ごしたが，座間事件の数年前に両親が離婚した。そして母親と妹は別居することになる。

座間事件前，男は新宿区歌舞伎町の風俗店のスカウトマンをしていた。SNS の一つツイッターを利用したスカウトもしていたと言われている。2016 年３月には，『パチプロ～』というアカウント（現在は凍結中）で，デイトレードをしている内容をつぶやいていた。

しかし，違法店舗に紹介したとして，2017 年２月，職業安定法違反の疑いで逮捕，執行猶予判決を受けていた。８月中旬になってから事件現場となったアパートに住み着き，被害者となる女性たちを物色していた。ただ，スカウトでトラブルがあったのか，他のツイッターユーザー『暴露 @bakurosukauto』から「悪徳スカウト」として注意喚起があった。

> 新宿にいる○○（筆者注――男の苗字）というやつに注意してください！　悪徳スカウトです！　（2017 年１月 24 日午前４時 25 分）

> このスカウトに注意！
> 裏で引きまくってます！
> 歌舞伎町ミスド前近くに出没
> （2017 年４月４日，４時 48 分）

座間事件発覚後の 11 月 10 日未明，殺害された９人の身元が判明した。報道によれば，福島市の高校３年生（17），群馬県邑楽軍の高校１年生（15），さいたま市の高校２年生（17），埼玉県所沢市の大学２年生（19），埼玉県春日部市の女性（25）。横浜市の女性（25），八王子市の女性（23）。この７人はツイッターを介して知り合ったと見られる。このほか，知人の20代カップル，神奈川県厚木市の女性（21）と横須賀市の男性（20）。

事件が発覚するのには，きっかけがあった。行

方不明になっていた八王子市の女性の兄がツイッターを使って情報収集し，自主的に“捜査”を始めていたからだ。この女性は失踪前の2017年9月20日，ツイッターアカウントでこうつぶやいていた。

＃自殺募集
死にたいけど一人だと怖い。
だれか一緒に死んでくれる方いましたらdmください。
こちら23の東京です。車ある方だと嬉しいです　（2017年9月20日午後0時48分）

報道では，ハッシュタグ「#」が注目を浴びた。八王子の女性のツイートに「＃自殺募集」があった。「＃」は，特定のキーワードで繋がるための記号だ。ちなみに，ツイッターでハッシュタグが使われたのは2007年8月23日だ。@chrismessinaというアカウントで，

how do you feel about using #（pound）for groups. As in #barcamp [msg]?

とつぶやかれたのが最初だと言われている（宮原，2017）。

このツイートに容疑者が同調を示して，近づいた。この同じアカウントを使って，女性の兄が情報提供を呼びかけていた。

男が座間事件で利用したのは「自殺サイト」ではなく，ツイッターだ。複数のアカウントを使っていた。『死にたい』は8月，『首吊り士』は9月に開設した。プロフィールは『死にたい』にはないが，『首吊り士』には「首吊りの知識を広めたい本当に辛い人の力になりたい　お気軽にDMへ連絡ください」と書かれていた（現在は凍結中だ）。「首吊り士」のつぶやきにはこのようなものがある。

首吊りは苦しくない　苦しいのは気道を塞いでいるか緩衝材が合ってないから
（9月15日）

死ぬ前に最後に連絡したい人がいる方はまだ未練がある証拠なので，死ぬべきではないと思います　（10月6日）

ツイートを読むと，自殺の知識があるようにも見える。ただ，首吊りをするためには，ロフトがなくてもできるはず。なぜこだわっていたのかはまだ明らかになっていない。そんな『首吊り士』は，自らの様々な言葉で検索し，自殺を考えている人を物色していた。

座間事件は，報道ベースで見てみる限り，まだ快楽殺人であるような供述は出てきていない。男はどんなやりとりをしていたのか。座間事件の被害者は10代や20代といった若年層ばかりだった。筆者はツイッターで男と繋がっていた女性に話を聞くことができた。

2-1　性暴力の被害にあって「死にたい」と思った少女

男は少なくとも2つのアカウントを犯行に使っていた。2017年8月に開設した『死にたい』で，フリーターの直美（17，仮名）に9月12日，ダイレクトメール（DM）を送ってきた。直美には事件後の11月8日，自宅付近の公園でインタビューした。

2-1-1　自殺に関する男とのやりとり

直美によると，ツイートしたものに男が反応し，DMが送られてきた。

男　ご連絡ありがとうございます。神奈川に住んでおります　（9月12日9時22分）
直美　関東一緒ですね　（同10時53分）
男　自殺をお考えですか？　（同10時54分）
直美　はい　（同11時04分）
男　一緒に死にますか？　（同11時06分）

直美　何歳の方ですか？　（同 11 時 08 分）
男　22歳です。首吊りの道具と薬を用意してあります。　（同 11 時 10 分）
直美　殺してもらえないですよね　首絞めて　（同 11 時 11 分）
男　本気で言ってるんですか？（同 11時 12分）
直美　首吊り２週間くらい前に失敗してなんかもー首吊りのやり方が失敗するとしか思えなくて　（同 11 時 12 分）

こうしたやりとりは，自殺系掲示板の書き込みや「ネット心中」の相手募集のやりとりでも，よく見られる内容だ。男は「一緒に死にますか？」とのメッセージを送ることで，お互いが「死にたい」と思っている印象を植えつけた。「ネット心中」で亡くなった人や，心中を途中でやめた人のやりとりを見たことがあるが，自殺をめぐるネット・コミュニケーションでは，手段や道具などについて，時として，具体的な話になっていくことは珍しいことではない。

その後，直美とのやりとりは，無料通信アプリ「カカオトーク」に移行し，首吊りの具体的な方法を伝えていく。

男　色々つらそうなので，死にますか？　（同 23 時 33 分）
直美　首吊りで２回失敗しているから不安でしかたがないです　（同 23 時 36 分）
男　結び方，緩衝材，高さ，薬，ちゃんと勉強すればしねます　（同 23 時 37 分）
男　痛い，苦しい，未遂になると言ってる人は勉強してないから楽に死ぬ方法がわかってないだけです　（同 23 時 38 分）
男　実際に吊ってみて苦しかったらやめていいので，試しに吊ってみますか？　（同 23 時 40 分）
直美　あのー，本気で考えてますか？　（同 23 時 54 分）
男　本気です。
安楽死出来るよう，勉強して，道具を揃えて私も吊りました。　（同 23 時 55 分）
直美　未遂ですか？　（9 月 13 日 0 時 23 分）
男　言葉に語弊がありました。
薬を飲まずに，意識がちゃんと飛ぶか試しました。　（同 0 時 27 分）
男　私の方法をまとめました。（同 0時 29分）

と書き込み，続けて詳細な方法を直美に伝えた。そして男はこう続けた。

男　私が用意するので，責任持って安楽死させます。　（同 0 時 31 分）

男は直美に朝から深夜までかけて，自殺や安楽死の方法を詳細に提示していた。当初は「一緒に死にますか？」と，「ネット心中」を誘っておきながら，「安楽死させる」と，内容が変更されていることがわかる。

「（男は）カカオで通話したがっていました。『信用できたら，会いませんか？』とも言っていました。たまたま，別の人と電話をしていたので，通話することはありませんでした」。

ただ，直美は死にたいと思っていた。本当に殺してくれるのかとも考えたものの，半信半疑だったのだ。

「本当に殺してくれるのか？　言っていることは本当なのか？　と考えました。でも，神奈川は家からも遠いし，何もなかったら，時間と交通費だけがかかるだけ。でも，（報道を見て）言っていることと同じことをしたんだな，と思いました。本当のことを言っていたんですね。ならば，私も行って，殺されていればよかった」。

結局，直美は男のところには行かなかった。

2–1–2　少女が「死にたい」理由

直美は首都圏に住む。両親はいるが，家族は居場所ではなく，家族には違和感を抱いていた。そ

んな悩みを聞いてくれたのは，SNSの一つFacebookで知り合った，「30代の医者」を名乗る男だった。2017年1月，その男に呼び出され，秋葉原に行った。公務員を目指していた直美は，将来の話がしたかった。

話をして数時間後，男が「誰もいないところで話をしよう」と言い，男の自宅に向かった。直美はついて行った。すると，態度が急変し，レイプされてしまう。その影響か，病院に行くと，心的外傷後ストレス障害と診断される状況となった。

「（男は）ネットで知り合った最初の人で，信用していました。（望まない性行為ですから）抵抗をしたんですが，無理でした。終わったあとは1人で（男の家から）外に出て，震えていました。被害届は出しましたが，どうなるかわかりません。最初は外にも出られませんでした。学校にも行けない。だから（学校を）やめようと思いました」。

直美は6月，高校を中退した。しかし，トラウマ体験はまだ続く。座間の事件が発覚する2週間ほど前，つまり10月中旬，夜9時前に，気分転換に外を歩いていた。直美は辛いときにはよく散歩をしていたが，このとき，見ず知らずの人に車内に連れ込まれ，レイプされた。

「警察にも被害届けを出しました。（加害行為をした）男の家には行ったようですが，男に『知らない』と言われたようで，まだ逮捕されていません」。

こうした性被害の体験もあるためか，直美の自殺願望は消えない。こうした絶望感がベースにあった。

2-2　安楽死についてつぶやいていた30代女性

10月2日午前10時2分。芳子（仮名，30代，都内在住）は『首吊り士』から，ダイレクトメッセージが届き，やりとりをした経験がある。芳子さんには2017年11月11日，都内のカラオケボックスで話を聞いた。

2-2-1　「安楽死」というキーワードに関心を寄せた

芳子はツイッターで安楽死に関してつぶやくと，男からDMがきた（DMの内容は，芳子側の内容を紹介しない条件だったため，男側のみを紹介する）。男は，安楽死に関して，こうつぶやいていた。

> 男　気道を塞いでしまうのはただの窒息死です　血流を止める事を意識しましょう　なんとなく首吊りってこんな感じかな？　の勢いでやるのではなく，血管の位置や，締まるイメージを意識すれば，必ず安楽死出来ます　（9月17日）

「“精神疾患では安楽死ができない”とツイートしました。（『首吊り士』は）それをみて，DMをしたのではないでしょうか。自殺を募集している子だけに接触しているわけではないようでした」。

『首吊り士』は「安楽死」というキーワードにも関心を寄せ，「安楽死」とツイートした芳子に，「#」がなくても，DMを送った。10月3日の芳子へのDMでは，自殺の方法についての意見が書かれていた。

> 男　薬はかなりしんどいので，避けたほうがいいです。それなら首吊り飛び降りのほうが確実だし苦しみも少ないと思います　（11時53分）

その理由について書かれていた。

> 男　薬はよほど強いものを大量に飲まないと死ねないイメージが強いです（12時01分）

飛び降りについてもこうあった。

> 男　ある程度の高さで頭から落ちれば間違いないですよね　（同）

DMのやりとりは10月2日から始まったが，4日までの3日間で終わった。芳子は病院に入院していることを伝えた。男は，それ以上DMを続けるのを諦めた。

「私は自殺をしたいのであって，殺害されて死ぬのは望ましくはない。ただ，生きていることに意味を感じていないので，殺されたとしてもそれはよかった」。

2-2-2　女性の自殺願望は続いていた

芳子が初めて「死にたい」と思ったのは11歳，小学校5年生のころだ。母親からの，殴る・蹴るの虐待を受けた。父親は家庭を顧みないという家庭環境が大きな要因だ。進路にも口を出し，大学では心理学を専攻したいと思ったが，母親には「あなたは人の心はわからない」とまで言われた。

一方，学校では「いい子」を演じていた。成績もよく，クラスでは頼られた。いじめのあるクラスだったが，常に傍観者の立場だった。

中学時代に，屋上に昇って死のうと考えたこともあるが，実行はしていない。中1から日記を書き，ここで本心を綴った。しかし，本心ではないことを書いたことがあった。

「本音を言えばいじめられると思っていたから，本心を書くために日記をつけました。でも，本心を出せる自分は死んだと思ったんです」。

死にたい感情は抑えきれず，何度も過量服薬するようになり，ときに救急車に運ばれて病院に行き，生死をさまよったこともある。職場でセクハラやパワハラがあったし，結婚してからは夫からDVの被害を受けた。離婚も考えたが，手間がかかり，死ぬほうが楽だとも感じていた。そんなとき，容疑者からDMがあった。

2-3　「#自殺募集」に関心を寄せた高校生

容疑者との直接のやりとりはなかったが，高校2年生，恵美（仮名，17）は事件後，ネット上で情報を集めていた。恵美さんには2017年11月12日，首都圏の私鉄駅近くの喫茶店で話を聞いた。

2-3-1　「繋がっていたら，アパートへ行った」女子高生

「最初の事件が8月ですから，ちょうど私が自殺未遂をしたとき。この頃，（男と）繋がっていたら，アパートに行ったと思う」。

母親は教師経験があり，勉強には過度に厳しい。小学校のころから「1位じゃないとダメ」と叱られ続けた。100点を取るのが当たり前で，満点でも褒められない。家庭に居場所はなかった。

「死にたい」と思いつつ，生きているが，8月上旬，自分の部屋のクローゼットで首吊りをした。初めての自殺未遂だ。恵美の心情を理解していた家庭教師との契約を母親が打ち切ろうとしたのが理由だった。しかし，なぜか翌日，目が覚めた。

「自分が家庭教師代を払えないし，どうにもできない。大切な人との関係が取られるのが嫌だった」。

ツイッターのアカウントは4つ持っている。ツイッターはメールアドレスがあればその数だけアカウントが作れる。また，メールアドレスが実際には存在しなくても作れる。

4つのアカウントのうちの「病み垢」（心が病んでいる部分を出すアカウント）で「死にたい」とつぶやくが，未遂のときは特につぶやいていない。未遂後に思ったことがある。

「死のうと思えば，いつでも死ねるという安心感を得ました。ある意味，開き直ったんです」。

2-3-2　「自分はどうなってもいいけど，他人は助けたい」

一方，恵美は，他人を救いたい気持ちもある。ツイッターで自殺相手を募集していた10代の女の子にDMを送り，話を聞いた。やりとりは続いたが，今ではツイートが更新されない。

「話を聞いて止めようと思った。もうつぶやかれないので，この子は消えちゃったんだろうと思う」

恵美は周囲にSOSを出すことを諦めている。スクールカウンセラーに母親のことを話したことがあるが，担任に伝わり，最終的に親に情報が届いてしまった。このときから学校を信用してない。

信用できるのは病み垢でつながっている人たちだ。

かつてツイッターで知り合った男性に会いに行ったことがある。誰もいないところで話がしたいと部屋に行ったときに，なかなか帰してくれなかった。なんとか危機を脱した。

「ちょっと危険かな，と思いました。でも，死にたいし，どうなってもいいと思っていますので，危険と知りつつ，付いて行きました。もしかすると，事件の犠牲者もそんな気持ちだったのではないでしょうか」。

3. 事件に関するアンケート

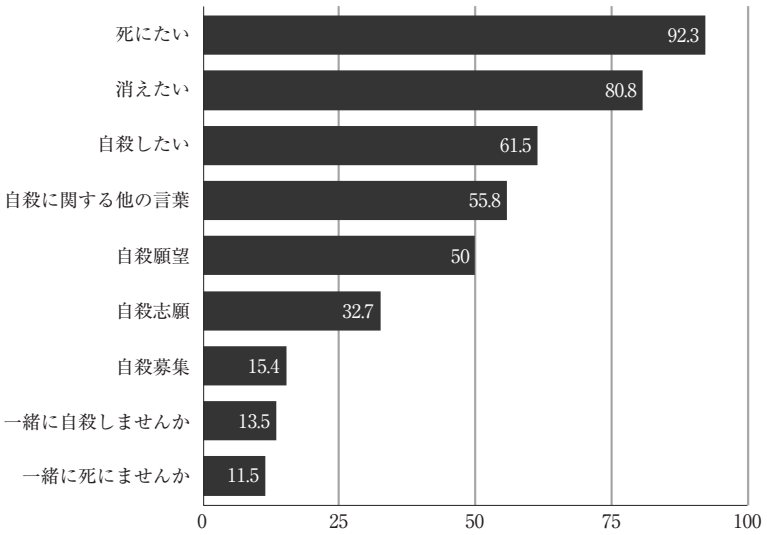
筆者は座間事件に関するアンケートをとった。期間は 2017 年 11 月 20 日から 2018 年 3 月 1 日まで。方法は Google アカウントで利用できるアンケートフォームを使った。そのアンケートを，筆者が利用するツイッターアカウントでつぶやいた。回答者 55 人の中で，有効なメールアドレスが記入されていた回答は 52 件（性別は，男性 13，女性 38，その他 1。年代は10代 12，20代 18，30代 9，40代 5，不明 8。職業は学生 19，会社員 10，無職 9，フリーター7，自営業 4，その他 3）。

「自殺系サイトにアクセスしたことがある」のは 37 で 71.2%。「ない」は 12 で 23.1%。自殺に関する一般の世論調査（平成 28 年度自殺対策に関する意識調査）では，自殺系サイトを「見たことがある」の合計は4.4%だ。座間事件に絡んでインターネットでのアンケートでの回答者と比較すると，一般の世論調査の回答者の 16.1 倍だ。それだけ，自殺のリスクが高いユーザー層が回答したことになるのだろう。

座間事件では，ツイッターで「死にたい」とつぶやく若者たちの姿が注目を浴びたが，SNS でつぶやいたことがある言葉（複数回答）（図 1）としては，「死にたい」は 48，92.3%が最も多かった。ついで「消えたい」が 42，80.8%。「自殺したい」は 32，61.5%などとなっている。一時期，「ネット心中」が連鎖したが，そのときに使われた「一緒に死にませんか」（6，11.5%），「一緒に自殺しませんか」（7，13.5%）はいずれも 10%前後となっている。

理由としては，回答（複数回答）した人 50 人のうち「瞬間的な感情をぶつけた」が 39，78%，8 割近くがそう答えている。ついで「心の整理」で

図 1　SNSでつぶやいたことがある言葉



24，48％，「誰かに話を聞いて欲しかった」が23，46％，「誰かとつながりたかった」のは 13，26％とそれほど多くのはない。その他の中には「殺して欲しい」というものあった（図 2）。

つぶやいた反応（複数回答）（図 3）としては，回答者 44 人のうち最も多いのが「反応なし」「無視」などが22，50％。つぶやいても話を聞いてくれなかったユーザーが半数いた。「話を聞きます」「死なないで」が同数で 18，40.9％。「ナンパされた」というのも 5，11.4％。自殺念慮のあるネットユーザーはナンパ対象になると言われているが，一定数がナンパされていることが示された。

その反応の結果，どう思ったのか（図 4）。回答者 45 人のうち，「死にたいと思った」が最も多く，21，46.7％，「余計なお世話だと思った」は 14，31.1％。「話は聞いてくれたが，的外れだと思った」

図 2　つぶやく理由

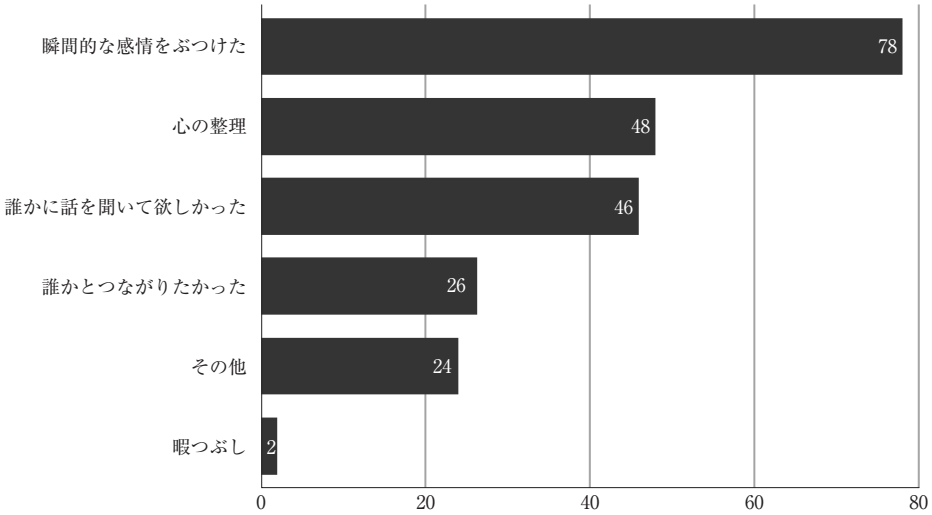
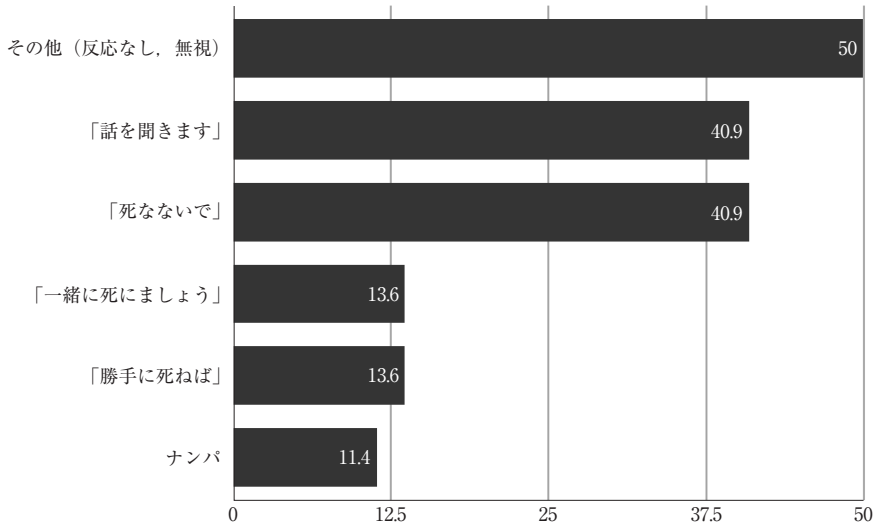


図 3　つぶやいた反応



は 13，28.9%。「その他」は 19，42.2%で，「何も変わらない」「孤独であることを感じた」「反応がないので冷たいと感じた」というネガティブな反応が多かった。一方で，「話を聞いてくれて嬉しいと思った」は 8，17.8%，「生きたいと思った」は 2，4.4%と少数だった。事件後のアンケートだけに，SNS で出会った相手がどのように話を聞くべきかという学びがなかった時期でもあったためだと思われる。ただ，「生きたい」と思えた回答者もいたことから，SNS によって「生きたい」と思えた理由について聞き取り，要素を抽出することは今後の課題と言えそうだ。

ネットで「死にたい」とつぶやいているとなると，日常的に相談相手がいないのだろうかと想像できなくもない。「死にたい，消えたいと言える人がいるか」と聞いたところ，回答した 51 人のうち，「いない」と答えたのは 18，35.3%で，「いる」と答えた 15，29.4%よりも多い。ある程度，想像

図 4　反応の結果，どう思ったか

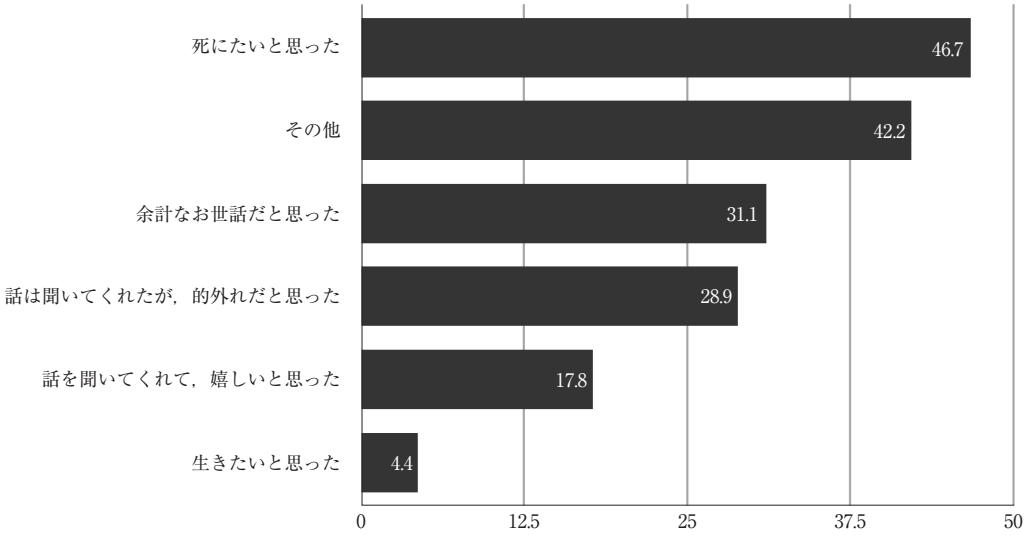
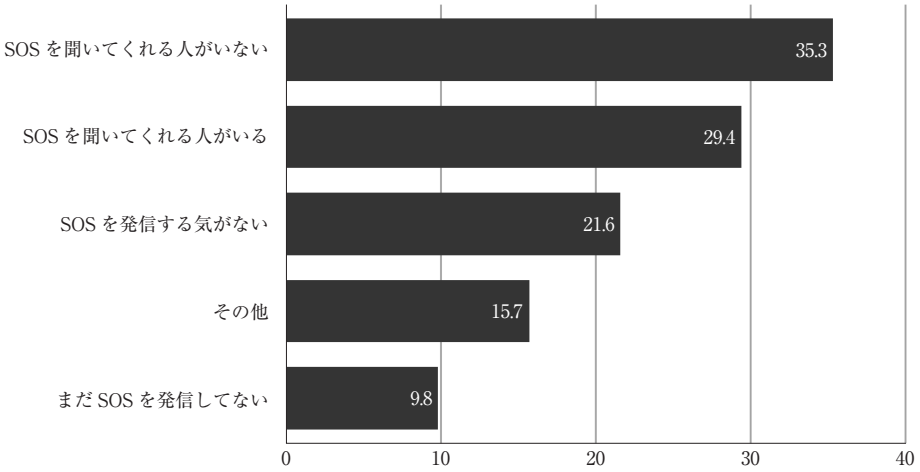


図 5　SOSを聞いてくれる人がいるか



できた内容だが，「発信する気がない」としたユーザーも 11，21.6％いた。周囲への不信感があったり，諦めの気持ちがあると見られる（図 5）。

回答者の母数が少ないために，このアンケートだけでは断定できない面があるが，SNS で「死にたい」「消えたい」とつぶやくからといって，日常で孤立している人ばかりではないことも見えてきている。

ただ，自由回答で「10人目になりたかった」「殺された人の代わりに死にたかった」「私が代わりになれていたら」「羨ましい」「私も混ざりたかった」など，「被害者になりたい」人たちの存在は見過ごせない。

4. 考　　察

座間事件は，閑静なアパートの一室に９人もの遺体が発見され，かつ，ほとんどの遺体が10～20代の女性であったことから，衝撃的なニュースとして伝わった。しかし，1の「自殺とインターネットにまつわる事件史」でも紹介したように，10～20代の女性が自殺をめぐってインターネットにアクセスし，コミュニケーションを取るのは今に始まったわけではく，インターネットが大衆化された1990年代後半からの現象である。しかも事件化という意味でも，その当時からなされてきている。

日本の年間自殺者数は 1998 年から 2012 年まで３万人を超えた。ピークは2003年だったが，当時は「ネット心中」が連鎖していた時期とも重なる。しかし，単純にネットと自殺の相性だけに関連を求めることはできない。この年は，携帯電話普及率が90％を超えた時期ではあるが，非正規雇用が30％を超えた時期でもある。将来の不安定要素が影響していたことも否定しきれない。

2013年以降は，年間自殺者が3万人を下回っている。中高年の男性の減少幅が大きい。2006年に成立した自殺対策基本法に加えて，10年の貸金や出資法の改正によって，借金の利息に関する制限などによる成果が見えた結果だとも言われているが，実際にこれらの施策と自殺者減少との因果関係は検証の必要がある。しかし，10～20代の自殺者数は，中高年男性と比べると減少幅が低く，10代は横ばいである。中学生に限ると増加傾向を示している。加えて，女性全体の自殺者数は減少幅が低いことを考えれば，10～20代の女性が，自殺をめぐるネット・コミュニケーションの場に多く存在することは想定できる現象だ。

こうした自殺をキーワードに集まるネットコミュニケーションの中には，「殺された人の代わりに死にたかった」「私が代わりになれていたら」「10人目になりたかった」というユーザーがさまよっている現状がある。

自殺を予防することに関して，「TALK の原則」ということが言われている。T は「Tell」で，「言葉に出して心配していることを伝える」。A は「Ask」で「『死にたい』という気持ちにして，素直に尋ねる」，L は「Listen」で「絶望的な気持ちを傾聴する」，K は「Keep」で「安全を確保する」を示す。自殺に関するネット・コミュニケーションでは，T と A と L はなされている。しかし，ネットである限り，K の「安全を確保する」ことは難しい。相手の連絡先や住所を知っている場合もあるが，ほとんどの場合は匿名のコミュニケーションだからだ。その意味で，ネット・コミュニケーションの課題は，K の部分になるだろう。

事件を受けて，厚生労働省は，LINE やツイッターなどの SNS を用いた，若年層向けの相談を始めている。これまで電話相談にはアクセスしない層が SNS 相談にはアクセスしていると言われている。「K」以外の実践の場が広がったと言える。ただ，ユーザーにとってみれば，従来のネット・コミュニケーションの中に，SNS 相談がその中の選択の一つになったにすぎない。そこから，何らかの「安全の場」につながればよいが，容易ではない。

日本財団の調査（インターネット調査，対象は全国の20歳以上の男女，有効回答は21,142人）で

は，2016年の調査で「1年以内に本気で自殺を考えた」人は3%だった。その中で，2017年調査に応じた人のうち，67%が「1年以内に本気で自殺を考えた」と回答していた。また，2016年調査で「1年以内に自殺未遂をした」人は0.4%。この中の，2017年調査に応じた人のうち，55%が「1年以内に自殺未遂をした」と答えている。つまり，一度，自殺念慮を抱くと，継続する。なかなか，自殺念慮が薄まっていかない現状が明らかになっている。

もちろん，10代，20代からすれば，電話相談よりも敷居は低いがアクセスされた数が多いということと，考え方や行動の変容までいたったのかは検証もされていない。数字としてSNSのアクセス数の増加は示されているものの，ユーザーの満足度や思考・行動の変化についてどのように評価していくかが今後の課題である。そのためにも，個別の聞き取りは重要になる。そして，安全な居場所の確保に提供することが必要になる。それが同様の事件を減らしていくことにつながるのではないか。

参考・引用文献

相田くひを（1999）「インターネット自殺毒本」 マイクロデザイン出版

碓井真史 「死にたい気持ちは『ステイタス』：自殺とネットと若者と」 Yahoo個人『碓井真史の心理学でお散歩』2017年11月12日（https://news.yahoo.co.jp/byline/usuimafumi/20171112-00078017/）

厚生労働省 「平成28年度自殺対策に関する意識調査」（https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000155452.html）

厚生労働省 「自殺対策強化月間（3月）SNS相談事業の実施結果（3月31日時点）」 2018年4月27日（https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12001000-Shakaiengokyoku-Shakai-Soumuka/0000204756.pdf）

厚生労働省 「非正規雇用の現状と課題」（https://www.mhlw.go.jp/content/000179034.pdf）

厚生労働省自殺対策推進室・警察庁生活安全局生活安全企画課 「平成29年中における自殺の状況」 2018年3月16日（https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/h29kakutei-01_1.pdf）

渋井哲也（2004）「ネット心中」 NHK出版

渋井哲也（2005）「男女7人ネット心中　マリアはなぜ死んだのか」 新紀元社

渋井哲也（2007）「明日，自殺しませんか」 幻冬舎

渋井哲也（2009）「実録・闇サイト事件簿」 幻冬舎

渋井哲也 「なぜ自殺志願者たちはSNSに書き込むのか」 iRONNA　2017年11月3日（https://ironna.jp/article/8089）

渋井哲也 「座間9人遺体事件　SNSに『死にたい』と書き込む人の心理とは」『文春オンライン』2017年11月6日（http://bunshun.jp/articles/-/4816）

渋井哲也 「自殺願望―交流サイトの闇―」 NHK解説委員室　2017年11月27日（http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/285180.html）

渋井哲也 「ネットに潜む闇　座間九遺体事件」『月刊潮』 2018年3月　116–121頁

渋井哲也 「ドクター・キリコ事件の衝撃 『生きづらさ系』はネットの闇から生まれた」『文春オンライン』 2018年8月17日（http://bunshun.jp/articles/-/8596）

清水新二 「ネット自殺に関する社会学的考察―現代日本の人間関係パターンと情報機器コミュニケーション―」平成16年度構成労働科学研究補助金構成労働科学特別研究事業「Webサイトを介しての複数同時自殺の実態と予防に関する研究」

末木新（2013）「インターネットは自殺は防げるか」 東京大学出版会

末木新 「座間連続殺人事件の教訓：インターネットを自殺予防に活用するために」『nippon.com』 2017年12月6日（https://www.nippon.com/ja/currents/d00371/）

鶴見済（1993）「完全自殺マニュアル」 太田出版

日本財団「第2回自殺意識調査報告書」2018年9月13日（https://www.nippon-foundation.or.jp/news/pr/2018/47.html）

美智子交合（1999）「わたしが死んでもいい理由」 太田出版

宮原れい 「Twitterの「ハッシュタグ」が誕生から10歳に　世界全体で一番使われたハッシュタグは？」『ねとらぼ』2017年8月23日」（http://nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/1708/23/news018.html）

文部科学省「教師が知っておきたい　子どもの自殺予防」2009 年 3 月（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/04/13/ 1259190_12.pdf）